

資料涉獵余話

その63

前回の本欄に、本紙を離れたため、伴われ「漢詩季行」の筆者嶋岡成美氏が書かれた「太宰春台展を見て」と題する一文が載った。内容は、同展覧会に展示された春台の一詩に関する考察である。偶然にも、私もその書も珍重された。

春台の書論と書作の視点から考えていたことがあるので述べてみたい。

飯田は、江戸中期の儒學者、太宰春台（一六八〇〜一七四七）の揺籃の地である。彼は幼少時、父・辰辰が主家

来書（きりかき）をもつ作品を観たことが品があるのに驚いた。

ハンカチ大の絹布（縦38センチ・横43センチ）に墨書されたその極書は、最後に「二六居士

巖谷修題」と記して署名・落款もある。文章分爲雙幅書法蒼勁古

巖谷一六が認めた

太宰春台の書

一六の添状を中心として

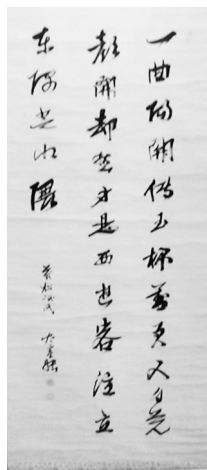
鎌倉 貞男

は漢文で、文字数は七十字程である。文末に「乙未夏六月上流觀干

信陽姫城客舎」とある。治三筆の一人である巖谷一六（一八三四〜

一九〇五）が書いた由（飯田）の旅館でこの

一六が認めた春台の書



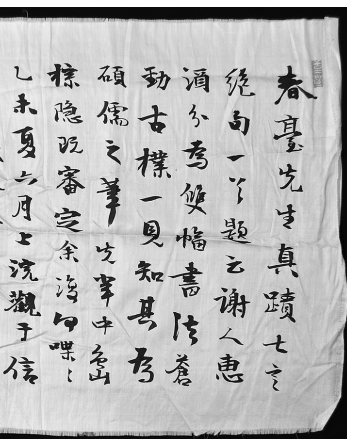
絶句一首に題して云う。人の酒を患むを謝し、双幅たるを分かつ。書法蒼勁にし

と為す。先輩の中島復た何ぞ喋々せん。こつ訓めば、春台の真蹟であるこの七言絶句の軸は、もともと双幅であったのを、この時に分けたことにな

る。書は、筆勢が枯れていて、しかも力強

真蹟であるこの七言絶句の軸は、もともと双幅であったのを、この時に分けたことにな

る。書は、筆勢が枯れていて、しかも力強



一六が書いた添状

十八年五月である。それから彼は当地に百日

以上、一六の添状を余滞在し、以前本欄で紹介した名古屋神社の奉納額その他多数を揮毫して去った。そこに

はいずれも「明治乙未」とあることから、右の極めを書いたもの

の時のことに相違ない。この書も興味深い。